ISSN 0910－8610

ULIS Library Communications

図書館情報大学附属図書館報

Vol. 17 No. 2 2001

目　次

生涯学習のための図書館情報学（関口礼子）……2
明治期の子どもの本（赤星隆子）……4
サブジェクトゲートウェイ（緑川信之）……5
平成12年度附属図書館統計……6
沖縄の七不思議（栗山正光）……7
図書館から……8
附属図書館日誌……8

生涯学習のための図書館情報学*

関　口　礼　子**

学生のタイプ

ここのところ数年，毎年私は「社会教育」の授業の受講者に，授業前の休みの間に社会教育による学習と思われるものを観察し，それについて観察記を作成しなさい，という課題を出している．

この反応は，大きく見て，5つぐらいに分かれる．

①授業前で社会教育がなんだかわからないから，どこへ行って観察をしてよいかわからずに，授業をとるのを止めてしまう人．

②社会教育がなんだか教えてくれるのが授業じゃないか，それを教えずに課題を出すなんてけしからん，と学務課あたりに文句を言いに行く人．

③私のところへ，直接聞きにくる人．

④適当に，それらしきもので間に合わせて，観察記を書く人．

⑤先輩に聞いたり，図書館で調べたりしてから，観察にでかける人．

学校で学ぶことは

この課題を出すにはいろいろな意味があるが，そのうちの2つは，次のようなことである．まず1つ目は，授業前に，授業のタイトルになっている「社会教育」とはなにか，ということを考えてみてもらいたい，ということ，そして，2つ目は，図書館情報学の本質を理解しているかどうか，ということとかかわってくる．

第1については，社会教育に似たような言葉に，教育社会学，社会科教育，社会的教育など，がある．それぞれ固有の歴史的発展をもって，固有の内容を意味しているのだが，それが，言葉の類似からゴチャゴチャに混同されて使われることがよくある．授業の中では，ちゃんと定義しているのだが，最後の試験のときに，とんでもない理解をしたままでいる学生がいることに気づく．単に，言葉の上で定義したのみでは，左の耳から右の耳に素通りしてしまうらしい．

第2は，図書館情報学というのは，他者が情報を求めたとき，求めている情報がどこにあるかその所在を明らかにして，その情報を提供することを目的とするための学問領域だと考えるからである．図書を分類し，装備し，配架するのも，目録を作成するのも，データベースを作成するのも，書誌をつくるのも，検索の仕方を工夫するのも，コンピュータやネットワークの知識を持つのも，結局は，世界中にある情報のなかから必要なものを探し出し，入手するためである．他者のためにそれをするのに，自分のためにもそれをすることを考えないようでは，図書館情報学の本質を理解しているとは考えられない．

学ばなければ，なにもできない

先に述べた①のタイプの学生は，人生においても，分からないことがあると，すぐ諦めてしまって，落伍者になりかねない．このタイプの学生は，人生，自分が現在知っていることだけでは，何事も解決しないのだということを，知ってほしい．

②のタイプの学生は，たぶん学校の成績はよい学生であろう．しかし，自分は，常識，または，一般教養が欠如しているということを自覚してほしい．個々の授業の課題を出し，責任を持っているのは，学務課ではない．学務課に行っても，忙しい学務課に余分な仕事を増やすだけで，問題の解決は得られない．このようなタイプは，世の中の不穏を敢えてかきたてようとする不穏分子になりかねないし，また，他者を誹謗することによって自分の優越性・優秀性を宣伝しようとするような輩になりかねない．

③のタイプの学生には，この件に関してはもっとも的を得たところに情報を得にきたということができる．私は，次のような説明をしている．「授業開始前に行う課題であるから，結果的に見学したものが社会教育でなかったとしても，それはかまわない．授業に入ってから，定義をするし，定義をしたあとで，自分の見学したものが，果たして社会教育によるものであったかどうか，各自，改めて検証してもらいます」と．それを聞いて，安心して帰ってゆく．

④⑤については，もう述べない．が，⑤については，もっとも図書館情報学の本質を理解して，実際にそれを応用できるまで体得している人と言えよう．

情報源としての人間

ここでひとつ付け加えておきたいのは，有効な情報は，図書やコンピュータからのみ来るものではないということ．この課題はここ数年続けて出してい

*"Library and Information Science" for "Life-Long Learning" by Sekiguchi-Reiko

**本学教授

るので，そして，なぜこのような課題を授業前に出すかは，上記に述べたこと以外のことも含めて，毎年授業で説明しているから，先輩に聞けば，すぐわかることである．「情報」というとき，図書やコンピュータも重要であるが，そればかりが幅を利かせて，もっとも根源的な直接的コミュニケーションによる情報の取得が，忘れ去られがちであるのに気づく．直接的人間的なコミュニケーションの回路をつくることが非常に下手になっているのに気づくのである．

図書館の衰退？

近年，図書館について，いろいろな気になる風聞が入ってくる．図書館の閉鎖，人員削減，司書資格を持たない職員の増加，司書資格を持った人は正規の職員でなくパートとして採用するという事実，指導力の不足する問題教員を図書館にまわせというような発言…．また，ある時期，某公共図書館の司書についての悪口が頻繁に耳に入ってきた時期があった．その司書は，残念ながら本学の卒業生であった．そしてキビキビと働く，有能な人物であった．

その司書の図書館情報学の知識は豊富である．しかし，決定的なのは，利用者が何を求めてその図書館に来ているかということへの配慮が欠如していたという点である．

近年，図書館に来る人々の階層は，以前とは異なっている．また，何を求めて来るかも異なっている．人々が必要とする情報の内容も異なってきている．一般の人々が基礎的に持っている知識や技術も高まっている．多様化している．周囲の文化的環境も高まっている．図書館や司書に対しても，自分の環境や自分の能力では解決しないから，図書館や司書のところにやってくる．そして，それを図書館や司書が充足できないとき，図書館不要論や司書不要論が出てくる．

図書館のイメージを変えた経験

私が図書館に対するイメージを変えた一つの経験を紹介しておこう．

その昔，カナダで自動車運転免許を取ろうと思ったとき，どこへ行ったらよいかわからなかったので，図書館の親しくなった職員に，どこの自動車学校がよいか尋ねた．暇そうな時間をねらって，雑談のつもりであった．

彼女は，こっちへ来いというのでついてゆくと，電話帳のところへ私を連れてゆき，タウンページの自動車学校の一覧を開けて示してくれた．

私は，こうしたことを聞ける人がいないので，たまたま軽い話をするようになった図書館の職員に，雑談のつもりで尋ねたのであったが，彼女は，図書館司書としての職務として，情報を与えてくれたのに気づいたのだった．尋ねたが，どの自動車学校が評判がよいかという個々の自動車学校についての評価は，彼女の口からは聞けなかった．自分で選びなさい，ということだった．あなたの住む地域のそばのは，これと，これと，…とだけ教えてくれた．

見事だと思った．私の求めに応じて，図書館で入手できる資料から，必要な部分を探して提供してくれた．内容は，生活情報であり，すなわち，生活情報のレファレンスにも気軽に応じてくれたのだった．しかし，その資料にあげられている事柄以外の，自動車学校についての自分自身の個人的な評価は，多分噂話などで知っていたであろうが，一切差し控えられた．司書としての職分の範囲にきっちり線をひいた見事な対応だと思った．

生涯学習の必要性

学校教育で何かを習うのは，究極には，世の中に出たときに，よりよく自分が直面した問題を解決するためである．現代のような高度な知識を必要とする職業が多くなると，職業上の課題を解決するにも高度な知識や技能が必要になる．だからこそ，そのような事柄を学校で学ぶ．しかし，学校という純粋培養器のなかで習ったことをそのまま使用できるような環境はほとんど存在しないといってよい．習ったこととそっくり同じ状況でなければ使用できないのでは，いくらたくさんのことを習っても適応できない．

生涯学習とは，どこかの講座のようなものに出席するということだけではない．大切なのは，人生の課題にぶつかったとき，その課題を解決するためには，自分のすでに持っている知識の上に，あらたに学びたす必要があるということを知っているということである．そして，学ぶ方法を知っているということである．そして，その学ぶ材料をもっともよく提供してくれるのは，図書館であり続けてほしい．そのためには，図書館の運営もニーズに合わせた柔軟なものであってほしい．

教育基本法の改正の議論もなされているが，学校教育の目的は「人格の完成」ではなくて，「生涯学習者を育成」することであると，私は考えている．

資料紹介㊸

明治期の子どもの本*

赤　星　隆　子**

昨秋，本学図書館としては初めて明治期の児童図書が入った．その中の一部を紹介しよう．

周知のように近代日本児童文学は明治24年(1891)博文館刊行の『少年文学』叢書から始まると言われる．巌谷小波が第1編を書いたこの叢書は内容や表現がさまざまで，かなり高度なものも含まれていてまさに“少年文学”であり，今日でいう児童文学とは言い難い．今回購入した第7編，幸田露伴著『二宮尊徳翁』〔090：Ko-16〕は文語体であるが，第9編，大江（巌谷）小波著『當世少年氣質』〔090：I-97〕は少年を主人公とし人生訓を主題とした言文一致体の短編を9編集めたものである．また同じ年に博文館から出た『幼年文學』第2の小波の『猿蟹後日譚』〔090：I-97〕は柿の種と握り飯が協力して，善良な猿をいじめる強欲な蟹をやっつける話である．活字ではなく木版で挿絵が文中に入っていて頁づけがない．

こうした和装本が当時の主流かと見えるが，明治21年(1888)に出た田村直臣の『童蒙道しるべ』〔090：Ta-82〕は洋風の製本のハードカバーで洋書のような標題紙がある．牧師である著者が米国の子ども向けの教訓談話を書き直したもので，従順，正直，信仰などの大切さを例えた話を集めている．完全に口語体で，挿絵は恐らく原書からとったと見られる銅版画である．

当時の児童文学作家といえば小波が特に有名だったためか，その名声にまぎれて売ろうとした寺谷大波編，博文館発行『頓智娘』〔090：Te-64〕という便乗本まで出た．

もっとも小波の名も大江小波，巌谷小波，漣山人，とその時々に違い，表紙，奥付，広告でも一定せず，読み方も“おほえのさざなみ”，“おほえこなみ”と仮名が振ってあって紛らわしく，利用され易かったのかもしれない．

一方，児童文学作品としては後世からは一顧だにされていないが，安価で，おそらく大量に売り出された，簡単な作りの子ども向けのものがある．例えば教科書出版社であった金港堂発行の『お伽噺十二ケ月』『金港堂豪傑談』，『豪傑噺』や春陽堂発行の『家庭お伽話』『家庭お伽文庫』などの叢書？からは当時の一般向けの児童図書の様相がうかがえる．これらは今回購入した18冊を見ても，比較的年少の読者を対象としている．『家庭お伽話』（これも小波の御伽噺と紛らわしい）では60頁くらいに外国と日本の話が一つずつ二編ごく短くまとめられている．例えばハムレットと大岡裁判とが，ガリヴァー旅行記と待賢門の戦とがそれぞれ一冊に組み合わせているなど当時から子どもの本は外国の作品に依存し，ダイジェスト版が多かったことが分かる．

大人の本と同様名作の翻訳が多い．今回はその中で文語体の名訳といわれる森田思軒訳『十五少年』〔090：V-62〕が入った．これはジュール・ヴェルヌの『二年間の休暇』を英訳本から重訳したものである．表紙に十五人の少年の顔が描かれ読者を引き付ける工夫がみられる．この時期の児童図書の特色は継続刊行が多いことである．『少年文学』は2年間に16点刊行し，金港堂や春陽堂もまるで月刊雑誌のように読者の短文や俳句を懸賞募集して巻末に掲載したりしている．漢字に全部平仮名が振ってあるが，表記や文体は多様である．当時の国定教科書は1，2年生は片仮名から教えたはずだが，これらは平仮名表記が大部分である．

明治年間の児童図書の出版点数や出版部数は明らかではない．分野別の納本点数はあるが児童図書という区分はない．どこまでを児童図書とするかの線引きがなかったか，当時は検閲を主とした内務省への納本だったため，児童図書はその対象ではなかったのかと推測する．今後，国会図書館・国立国際子ども図書館で，古い児童図書目録の整備とともにこうしたデータが明らかになることを願っている．

---

*Children's Books published in Meiji era by Akaboshi-Takako

**本学教授

ターミノロジー㊸

サブジェクトゲートウェイ*

緑川信之**

サブジェクトゲートウェイ（Subject gateway あるいは Subject based information gateway）とは，「インターネット上の情報資源に関する，検索・ブラウジングが可能な目録を提供するオンラインサービス／サイトである．基本的には，学術的な主題領域に焦点を当てている」[1]．簡単にいえば Web 上の情報資源を対象とする目録システムである．

Web 上の情報資源を検索・ブラウジングできるという点ではサーチエンジンと似ているが，サブジェクトゲートウェイは以下のような特徴を持っている[2]．

1．公表された基準にもとづいて人間が情報資源を選択（サーチエンジンはアクセス回数の機械的な計数などにもとづいて選択）．
2．人間が内容記述を作成（サーチエンジンは機械的に文を抽出して要約を作成）．
3．かなり深くブラウジングできる構造／分類（リンク集はほとんど構造化されていない）．
4．人間が情報資源の書誌的メタデータを作成．

Yahoo!のように人間が情報資源を収集し，構造化／分類を行っているサーチエンジンもあるが，あらゆる人を利用者として考えている．それに対して，サブジェクトゲートウェイは，基本的には特定の主題の研究者・専門家を利用者として想定しており，範囲が限定されているので，情報資源の選択基準が定めやすく，情報資源の数もある程度限定されているので内容記述，構造化／分類，メタデータの作成もしっかりできるというわけである．

また，個人が作成するリンク集は，特定の主題を対象とする場合が多いという点でサブジェクトゲートウェイに似ているが，個人が作成するので，選択基準，構造化／分類，メタデータがしっかりしていないものが多い．それに対して，サブジェクトゲートウェイは選択基準などをしっかり定めている．

しかし，選択基準や分類，メタデータなどをきちんと作成するためには，主題の専門家（研究者）と情報の専門家（図書館員）が必要である．多くの主要なサブジェクトゲートウェイは，研究者と図書館員の協力で成り立っているようである．ただし，サブジェクトゲートウェイといっても全分野を対象としているものもある（そのため，Subject をつけずに Information gateway と総称する場合もある）．

現在の所，主要なサブジェクトゲートウェイはヨーロッパを中心に作成されている．それらは，

PINAKES, A Subject Launchpad

にリストされている（2001年5月3日現在で48のサブジェクトゲートウェイが登録されている）[3]．

各種サブジェクトゲートウェイの作成・利用およびサブジェクトゲートウェイ間の互換性を支援するためのプロジェクトもいろいろ存在する．たとえば，

DESIRE（Development of a European Service for Information on Research and Education）

は，欧州連合（EU）の Telematics Application Programme の一環として設立されたもので，プロジェクト終了後も10の機関・団体（英国バース大学の UKOLN など）によって活動が継続されているが，その活動の中にサブジェクトゲートウェイの支援が含まれている[1]．

この DESIRE は，その活動の経験をもとに，サブジェクトゲートウェイを作成・運営・利用するための手引きとして，Information Gateways Handbook[4]を作成している．

---

*Subject Gateway by Midorikawa-Nobuyuki

**本学教授

[1] http://www.desire.org/html/subjectgateways/subjectgateways.html
[2] http://www.lub.lu.se/tk/SBIG-definition.txt
[3] http://www.hw.ac.uk/libWWW/irn/pinakes/pinakes.html
[4] http://www.desire.org/handbook/

平成12年度　附属図書館統計

図書館情報課

蔵書数	203,305冊

内訳	和漢書 142,343冊	洋書 60,962	和洋比	70：30

年間受入冊数	6,005冊

対前年比：1.82

内訳	購入	製本	寄贈等
和書	3,279	2,535	406	338
漢籍	26	5	0	21
洋書	2,700	2,234	369	97

継続雑誌タイトル数	2,252種

内訳	購入	寄贈	和洋比
和雑誌	1,900	245	1,655	84
洋雑誌	352	306	46	16

開館日数	243日

開館時間	2,426.5時間

入館者数	102,036人

対前年比：0.82

学外閲覧者	400人

※利用登録済学外者の閲覧人数を除く

利用登録者数	1,191人

対前年比：1.01

内訳	教職員 149	学生 852	学外者 190

時間外特別利用者	1,471人

対前年比：0.84

教職員	院生
369	1,102

貸出冊数	25,985冊

対前年比：0.99

内訳	教職員	学生	学外者
図書	25,794	13,340	11,590	864
雑誌	191	165	26	0

※雑誌は授業用一時貸出の冊数

参考業務件数	1,929件

対前年比：0.88

内訳	利用者別			質問種類別		
	教職員	学生	学外者	所蔵調査	事項調査	利用指導等
	643	846	440	924	50	955

文献複写件数	8,519件

対前年比：0.86

内訳	利用者別		複写形態別		
	学内	学外	電子複写	リーダープリンタ	マイクロフォーム
	7,266	1,253	8,516	3	0

相互利用件数	2,064件

対前年比：0.86

内訳	文献複写		図書貸出		他機関利用	
	受付	依頼	貸出	借受	共通閲覧証	紹介状
	1,019	544	216	249	10	26

沖縄の七不思議*

栗　山　正　光**

めぐり合わせで，沖縄の某大学図書館に勤務しつつ図情大の大学院生，と二足のわらじを履いている．海のかなたの沖縄で暮らして一年．カルチャーショックと言うほどでもないが，何度も目からうろこの落ちる思いをしたのでご紹介したい．観光ガイドブックでは得られない情報である．題して沖縄の七不思議．

■不思議その1■

歓迎会に出てまず驚いたのだが，宴会場に着いた人からどんどん酒（たいていオリオンビールと泡盛しかない）を飲み始める．乾杯まで待たないのだ．定刻通りに人が集まらない（「沖縄タイム」という悪名高い言葉がある）ので，先に来た人から飲んでよろしいという暗黙のルールが出来上がったと聞くが，真偽のほどは定かではない．

■不思議その2■

どこのスーパーでもコンビニでも，レジの店員さんが必ず商品を袋につめてくれる（どんなに混雑していても）．手際がいいし，考えてみれば籠に入れる代わりに袋に詰めていくだけなので，そんなに手間が違うわけでもない．これに慣れると，本土のスーパーがいかにも不親切に見えてしまう．

■不思議その3■

どんな料理にも豚肉が入っている．シーフードカレーを注文したらそれにも入っていて悲しかった（私は肉が大嫌いである）．本土ではあまり見かけないSPAM（SPAMメールの語源）などポークの缶詰がスーパーに山積みになっている．もう一つ，スパゲッティを注文するとパンが付いて来る．ラーメンライスというのがあるから，まあ不思議ではないのかもしれないが．

■不思議その4■

車のマナー．右折優先である（と思うほど強引に右折する車が多い）．信号待ちなどの時，駐車場や路地の入口は空けて停車し，出てくる車を入れてあげなくてはならない．対向車線が渋滞している時は，オートバイがセンターラインからはみ出して突進してくるので，正面衝突しないよう徐行が必要．

■不思議その5■

琉球朝日というテレビ局があるが，新聞のテレビ欄にはチャンネルの数字の代わりにQABと書いてある（9チャンネルなのだが）．6チャンネルは米軍放送（AFN）で，アメリカのニュースやドラマ，スポーツ中継などが楽しめるのだが（もちろん英語），新聞では別紙面の片隅に追いやられており，やはりチャンネルが書かれていない．ちなみに沖縄の新聞は「琉球新報」と「沖縄タイムス」の二紙の寡占状態．朝毎読は本土から空輸されているらしいが誰も読まない．

■不思議その6■

平坦な土地の多くは基地に取られ，急斜面に家がいっぱい立ち並んでいるのだが，一階をピロティにして駐車場にしている家が多い．大地震があったら一発で倒壊しそう．

■不思議その7■

デイゴという木があり，4月から5月にかけて真紅の花をつける．一つの枝に蕾がたくさんついて，遠くから見ると管を掃除するブラシのように見える．この花は不思議なことに枝の根元に近い方から根元に向かって開く．奥ゆかしいともひねくれているとも感じられて何だかおかしいのだが，奇跡のように美しい．

---

*7 Wonders of Okinawa by Kuriyama-Masamitsu

**琉球大学附属図書館情報サービス課長・本学情報メディア研究科博士後期課程2年生

図書館から

Library News

開館時間及び休館日の変更について

平成13年度から，附属図書館の開館時間及び休館日が下記のとおりとなりましたのでお知らせします．

開館時間 （ ）内は春季・夏季休業中の開館時間	月～金 （月～金	9：00～22：00 9：00～17：00）
	土・日曜日及び国民の祝日 （土・日曜日及び国民の祝日	13：00～18：00 休館　）
休　館　日	春季・夏季休業中の土・日曜日及び国民の祝日 開学記念日（10月１日） 年末年始（12月27日～１月５日）	

＊司書講習期間中の開館時間については，9：00～20：00となります．

＊平成13年度の開学記念日（10月１日）は開館します．

夏休みの貸出期間の延長について

７月28日(土)から，学部学生・科目等履修生・大学院生・研究生の図書の貸出期限が10月７日(日)までに延長されます．

夏休みの開館日と開館時間について

下記のとおり変更します．ご注意ください．

期　　間	月～金	土
８月４日(土)～ ９月21日(金)	9：00～20：00	13：00～18：00
９月22日(土)～ ９月30日(日)	9：00～17：00	休　館

＊日曜日，国民の祝日及び８月25日（土）は休館です．

筑波大学附属図書館利用証について

筑波大学附属図書館では，本学の教員・学生に，図書５冊３週間まで借りられる個人利用証を発行しています．

利用証の交付は，本学附属図書館で行います．希望者は次の時間帯にカウンターに申し込んでください．

月～金　　9：00～12：00，13：00～17：00

情報メディアユニオン〈ULIS〉の開館

５月11日に情報メディアユニオン〈ULIS〉が開館しました。これにより既存の図書館が附属図書館プリントメディア部門，ULIS 内の図書館部分が同ディジタル部門となりました。なお，開館日時は両部門とも同一です．

附属図書館日誌

Chronological Notes

3.19　山梨県立図書館職員見学（２名）

3.22　浜松医科大学附属図書館職員見学（２名）

4.18　情報メディアユニオン運営委員会開催（平成13年度第１回）

4.19　附属図書館運営委員会開催（平成13年度第１回）

5.11　情報メディアユニオン〈ULIS〉開所記念式典開催

5.12　情報メディアユニオン〈ULIS〉開所記念懇談会開催

5.12-18　情報メディアユニオン〈ULIS〉開所記念オープンハウス開催

5.16　資料選定専門委員会開催（平成13年度第１回）

5.25　埼玉純真女子短大図書館職員見学（２名）
フェリス女学院大学図書館長見学

5.29　平成13年度国立大学附属図書館事務部・課長会議（於東京医科歯科大学　図書館情報課長出席）
ハーバード大学ライシャワー日本研究所現代日本研究資料センター長見学

編集後記：附属図書館の改築，情報メディアユニオン〈ULIS〉のオープンに伴い，図書館情報課の事務室も４月に新しい建物に移りました。引っ越し当初はばたばたしていましたが，最近ようやく落ち着いてきました。そんな新事務室からの最初の図書館報をお届けします．

最新情報は附属図書館ホームページをご覧下さい．
（URL http://www.ulis.ac.jp/library/）

編集委員会：磯谷順一，松本浩一，横山敏秋，岡田信子，永濱恵理子，樋浦真弓

図書館情報大学附属図書館報　Vol. 17　No. 2　2001年６月25日発行（季刊）
編集・発行　〒305-8550 茨城県つくば市春日１－２　図書館情報大学附属図書館　☎0298-59-1210
Library, University of Library and Information Science/1-2 Kasuga, Tsukuba, Ibaraki 305-8550, Japan